

明朝の衰退と滅亡

松浦 純子

中国で九月に出版された『崇禎―勤政的亡国君』という歴史書が、回収処分されたという記事が目に残った。どうやら、習近平を連想させるかららしい。書籍の表紙にある「勤勉であればあるほど、国は亡びる」という宣伝文もまざったようだ。勤勉はいいことだが、なぜそれが国家や王朝の滅亡と結びつくのか。

崇禎帝とは明朝最後の皇帝である。祖父の万曆帝は八歳で皇帝の座につき、即位当初は有能な宰相のお陰で政治、経済はうまく回っていた。しかし、宰相が亡くなると墮落した生活を送るようになり、さらに運悪く豊臣秀吉の朝鮮出兵への対応、後金（後の清）と戦って敗北するなど財政が悪化していった。父は泰昌帝で一六二〇年に即位してひと月で急逝。暗殺されたという噂もある。次に兄の天啓帝が十四歳で即位したが、政治は宦官に委ねた生活を送り二十一歳で亡くなると、弟の崇禎帝が十六歳で即位。幼い皇帝が連続して即位し、政治を疎かにする現象は王朝末期にありがちなことである。

しかし、崇禎帝は書物のタイトルにある通り、決して怠惰ではなくむしろ勤勉であった。前皇帝の弊害を取り除き、国政改革に取り組もうとした矢先に大飢饉が発生して、各地で民衆が反乱を起こし、やがて反乱は反明へと発展していった。さらに、国外からは後金が国境を脅かし続けた。猜疑心の強い皇帝は後金のホンタイジの策略にはまり、万里の長城の山海関で満州族から国を防衛していた袁崇煥を殺害してしまった。後金は彼が謀反を起こそうとしているという偽の情報を流したのだ。この名将を惨殺したことは明にとって致命的であった。また、多くの人々を役職から罷免し、重臣たちの士気の低下を招いた。

ゼロコロナ政策に対する国民の不満、動静が途絶えた外相や同じく国防相の解任など、アメリカの外交官が「『そして誰もいなくなった』のようだ」と言っている様に、高官が次々と消えていることが、崇禎帝による相次ぐ役人の罷免と似ているのであろう。